

「ナノニ(仮)」登場人物表

楠木一葉	作家	楠の担当編集
新庄秀人		楠の妹
楠二葉		楠の自称一番弟子
栗原マコト		楠の語る女
女		楠の親友
小笠原真二郎		小笠原の妻
千代		

「ナノニ(仮)」・慷慨・あらすじ

楠木一葉はベストセラー作家。しかし、締め切りが過ぎているのに新作のネタが浮かばず、「文字も書いていない状態」担当編集の新庄は鬼のように怒っていた。作家なのに、大人なのと言われるうちに

【なのに】とは、幼馴染の口癖で小説家になるきっかけだったことを思い出す。考えをまとめるため幼馴染との出会いを思い出していく楠だが…

楠木の家

夕方の時間帯

上手側にソファとテーブル、下手側にもソファ

板付きで舞台中央、原稿用紙に自身の小説のあとがきを書いている楠。

下手側のソファに寝転がりながら、スマホを触っている二葉。

楠木 「…と、ここまでお楽しみ頂きまして誠にありがとうございます。えーと、いかがでしたでしょうか？」

◆栗原 下手からの入り

栗原 「お邪魔します！つと、あ、執筆中？」

二葉 「いや、いつものやつ。」

楠木 「私が思いますにストーリーというものは、何かが何かに変わる事だと
言われております、あえて例をあげるならば
桃から生まれた子供が鬼を退治する正義の味方になったり…」

二葉 「桃太郎だね。」

楠木 「争っている家同士の娘と息子が恋に落ち、悲しい運命を辿ったり。」

栗原 「ロミオとジュリエット？」

◆下手から新庄の入り

新庄 「お邪魔します。」

二葉 「新庄さんこんばんは」

栗原 「こんばんは」

新庄 「…あれ、どのくらいやってるの？」

栗原 「僕が来る前からだから…」

二葉 「10分くらいですかね。」

楠木 「…しかし、日常というのはそうではありません。

大したことない、1つ1つのありふれた、な〜んてことない事の繰り返し…まるで、ミルフィーユのように重なっていくわけです。重なる、重い、漢字で書くとなんとまあ、横棒の多いこと多い事。漢数字の一をこれでもか！ってくらいに書いておりますがねえ皆さん、その一があつたからこそ救われた、その一が誰かの背中を押した、なんてことがあるのではないのでしょうか？
一人の人間、一つの花、一年、一言、一口、一分、一駅…
ストーリーは変わる事、変わるきっかけというのが、その一に込められているのならば、その一があるのとないのでは大違い…」

新庄 「先生、先生！」

楠木 「何だようるさい…あ、新庄くん、いたの？」

栗原 「僕もいますよ！」

二葉 「お兄ちゃん、自分の世界にこもる癖、いい加減直した方が良いでしょう。」

新庄 「原稿取りにきました。」

楠木 「あ、…ああ、原稿ね。うん、わかってるよ。」

新庄 「ください。」

楠木 「待ちたまえよ、焦るのはよくないよ？君。昔からいうだろ？
急いで仕事を仕損じる。って」

新庄 「仕損じるも何も、完成してるんですよね？」

楠木 「……………うん。」

新庄 「何ですか？今の間は。」

楠木 「いや、あの…えっと」

栗原 「楽しみだなあ！先生の新作！僕ずっと待ってたんだ！」

二葉 「そうなんだ、私も！早く読んでみたい。」

新庄 「ですって。先生」

楠木 「え？あ、うん…」

栗原 「どうしたんですか？先生？」

新庄 「まさか、書いてない…なんてことありませんよね？」

二葉 「大丈夫ですよ新庄さん。さすがにそんなことあるわけじゃないじゃないですか。ねー？お兄ちゃん。」

新庄 「ですよねー」

4人 笑う

楠木 「コーヒーでも飲むかい？」

新庄 「ミルク少な目をお願いします。」

二葉 「私、ココア！」

栗原 「僕、カフェオレ！」

楠木が食器を上手に取りにいきながらのセリフ

楠木 「彼は私の担当編集者の新庄くん。」

新庄 「新庄秀人です。」※サスに入りに行く

楠木 「年は若いが、なかなかの切れ者と評判らしい。らしいというのは、本人が言っていたことなので定かではない。冷静沈着毒舌魔神。氷のような人だ。そして…」

二葉 「妹の二葉です。焼き鳥はタレよりも塩が好き！最近のマイブームは…」
※サスに入りに行く

楠木 「掘り下げなくていいから！好奇心旺盛でちゃっかりしている大学生だ。あと…」

栗原 「栗原マコトです！楠木先生の一番弟子です！」※サスに入ろうとする

楠木 「自称、僕の弟子らしいが空気が読めない、ものを知らない、礼儀もない、ないないづくしの青年だ。」

新庄 「それで先生、原稿はどこにあるんですか？」

楠木 「…すまない！新庄くん！実は、まだ完成してないんだ。」

二葉 「やっぱり…」

新庄 「いいですよ別に。想定してましたから。あと何ページくらいですか？」

楠木 「私は、構想がまとまれば筆は速いんだよ。そうだ、君たちだって知ってるだろ？」

うなづく 二葉と栗原

新庄 「ええ、存じております。構想がまとまれば、ですよね？」

楠木 「うん…。」

二葉 「ねえねえそう言えば今回の話ってさー、どんな話なの？」

楠木 「え！」

二葉 「SFとか、時代物とか、ホラーとか、推理ものとか、あるじゃない？」

楠木 「あるね。うん」

栗原 「ポピュラーに純文学とかも読んでみたいなあ。」

二葉 「今回のジャンルは何にあたるの？」

楠木 「今回は、えーと、そうね…何にしようか？」

新庄 「何にしようか？」

楠木 「いや、違う！違うよ、冗談！冗談に決まってるじゃないか！」

新庄 「笑えませんが、原稿みせてください。」

逃げ出す楠木 通せんぼする二葉と栗原

楠木 「…申し訳ない、「文字も書いてないんだ。」

新庄 「…一文字も!？」

楠木 「あながきなら、ちょっとだけ…」

新庄 「先生、締め切りとつくに過ぎてますよ？何考えてるんですか？何やってたんですか？あながき？本編もまだなのに、あながき？」

「どうするんですか？何してたんですか？」

楠木 「わかってるさ！でも仕方ないだろ。僕の頭のキャンパスには何の色も形も浮かばなかったんだから。」

二葉 「作家なのになんで例えがキャンパスなのよ。」

楠木 「いちいち上げ足をとるなよ、それにね。構想さえまとめればすぐに書きあがるんだ、だから」

新庄 「まとめれば、ですよね？」

楠木 「そうだよ、まとめれば！だよ。待ってる、今まとめるから。鬼のようにまとめるから！」

新庄 「お願いします。」

楠木 あぐらをかいて目をつむる。

楠木 「とは言うものの、思い浮かんでないものをまとめるとはこれいかに、という具合だ。さっぱり浮かばない…

時間は待つてはくれないし、新庄くんも待つてはくれない。

これが試練というのなら、神様はなんて意地悪でかつ

サディストなのだろう。昔からそうなのだ、いざという時につまずく。

もしも、私に突然変異で何かの能力でも目覚めようならすぐさまこの状況を打開するため、新庄君の目をくらし逃げ出すこともできるのだが、それもできない。得てして人というものは…」

新庄 「あの先生？」

楠木 「何？」

新庄 「ひとり言にしちゃ大きすぎませんか？」

栗原 「今の流れだと異種能力者物を書き始めるかと思いました。」

二葉 「ハードボイルドな感じの男くさいやつとか面白そう！」

新庄 「構想を、まとめてください。いいですね？」

楠木 「はい…。」

新庄 「あと、逃げようなんて考えるなよ。二葉も栗原も邪魔しないこと、わかった？」

楠木・二・栗 「…はい、わかりました。」

楠木 「あの、あの…あのね、新庄くん、あと一日だけ待つてくれたりとかできないかな？」

新庄 「いいですよ。そのつもりでしたし、此处でお待ちしています。」
楠木 「いや、家で待ってもらおうわけにはいかんだろ。大丈夫ちゃんと書くから今日は帰ってもらえないか？友人が訪ねてくるんだよ。」

栗原 「えー、締め切りなのに、お友達呼んじやったんですか？」

楠木 「君には関係ないだろ！なあ、新庄君、頼むよ…」

新庄 「先生、僕がどのくらい待ったと思ってるんですか？編集長から原稿貰うまでは帰って来るなって言われてるんです。」

楠木 「…頑固だね。」

新庄 「仕事熱心と言ってください。」

二葉 「あたしだってお小遣いもらえるまで帰りたくないなあ」

楠木 「わがままいうな。」

栗原 「僕も弟子入りさせてくれるまで帰りません！」

楠木 「調子にのるな。新庄くん、大丈夫だよ。私はやればできる男だ。必ず書く、名作を書き切って見せる。だから、私を信じてくれ。」

新庄 「…先生」

楠木 「なんだい？」

新庄 「そういわれて僕がはい、そうですかってなると思いますか？」

楠木 「いや…」

新庄 「ですよ。僕、先生のこと信頼はしてますけど信用はしてませんので」

楠木 「どういうこと？」

二葉 「わかる！」

新庄 「毎回、毎回締め切り遅れるし…」

二葉 「子供みたいにすぐへそ曲げるし…」

栗原 「優柔不断だし…」

楠木 「めんぼくない…」

新庄 「でも、先生なら必ず素晴らしい作品を生み出してくれるという信頼があります。」

楠木

「…。」

二葉

「そうよ、ファンの人達はお兄ちゃんの作品をまつてるんだもの！」

栗原

「だから、頑張ってください。」

楠木

「わかった。がんばるよ！」

二葉・新庄・栗原 ハイタッチ

楠木

「あ、でもその前にちょっと飲み物飲んできていいかい？」

新庄

「どうぞ。アルコール以外なら、コーヒーでも紅茶でもジュースでも」

楠木

「私は下戸だ。それにコーヒーも苦くて飲めない。」

新庄

「そうでした、先生は大人なのにコーヒーが飲めないでしたっけ。」

楠木

「…それ、なーんかひっかかるんだよなあ。」

新庄

「それ？」

楠木

「さっきも二葉が作家なのについて言っていただろう？」

二葉

「うん、言った。」

楠木

「栗原君も、締め切りなのについて、今も大人なのについて新庄くんにいわれそのフレーズがどうも、ひっかかるんだよな…」

新庄

「なのに。ですか？」

楠木

「思い出した！子供の頃に知り合った幼馴染の口癖なのさ。」

栗原

「へー、なのにが口癖なんて珍しいですね。」

新庄

「いいじゃないですか。もしかしたら、そのエピソードを思い出すことで新作のヒントになるかもしれませんよ！」

楠木

「なるわけないだろう、私の実体験だよ？ まったく君たちは何もわかってやいない。いつも言っている通りストーリーっていうのは…」

全員

「何かが何かに変わる事。」

栗原

「ですよね？」

楠木

「そうさ、だから小柄で泣き虫だった私が、今やベストセラー作家になっているなんてストーリー…あ。悪くないかも…」

二葉

「いいんじゃない？ 実体験は読者の共感を得られるし！」

栗原 「面白そうだし、楠木先生のファンはくいつきます！」

新庄 「構想をまとめるために、その幼馴染のお話聞かせてください」

栗原 「何処で知り合ったんですか？ 出会いのきっかけは？」

新庄 「締め切り過ぎてるんですからほら、早く速く！」

楠木 「わかったわかった！ そんな焦らせないでくれよ。…昔のことだからさ、ちよつとずっと思いついていかないと…幼馴染とはじめて会った時は、そうだ、いじめられてたんだ！」

栗原 「もしかしてそれを先生が助けたとか？」

楠木 「いや、逆だ。私がいじめられていて幼馴染が助けてくれた。」

新庄 「やっぱり」

◆幼少期を再現 いじめっこに扮する二葉と栗原

二葉 「やっちまいな！」

栗原 「このやろ！ このやろ！」

楠木 「うわああああん、やめてよー」

メモをとりながらそれを見ている新庄

◆女 幼少時代の姿で 下手入り たすける

女 「コラー……！」

二葉 「うわあああ！」

栗原 「逃げろー！」

ソファに戻って話を聞く 二葉と栗原。

女 「ほら、もう大丈夫よ？」

楠木 「私は当時背が低くてね、足も遅いしそのくせ口だけが達者で、よくいじめられていたんだ。」

女 「大丈夫だから、もう泣かないで？ ね？ ほら、一葉ちゃん、いつまで泣いてるのよ。」

楠木 「女の子に助けってもらうなんてかっこ悪いかなとは思ってたんだが、

新庄 「それよりも痛がって泣いてると心配してもらえると、そばにいてもらえると当時の私は考えていたんだな…。」

「かまってちゃんじゃないですか。」

楠木 「認めたくはないがね。そして、そんな甘ったれた私に彼女はこういった。」

女 「ほんと泣き虫ね、男の子なのに。」

◆女 下手にはけ

二葉 「厳しい…」

新庄 「辛辣…」

栗原 「きつっ…」

楠木 「そうなんだよ！とてもショックだったし、何よりも悔しかったね。その日から体力をつけようと必死だったわけなんだが…」

おもむろに腕立て伏せをし出す楠木

新庄 「はい、いーち、にー…」

上に乗ったり、わき腹をくすぐったりして邪魔する二葉と栗原

新庄 「全然だめじゃないですか。それで？」

楠木 「成長してきて徐々に思春期を迎えると、その、あれだ…相手を意識したりしてだな…へへへ」

栗原 「先生、顔きもいです。」

◆セーラー服姿の女下手入り

女 「なあに？話って」

楠木 「忘れもしない中学二年の夏休み！」

夏休みの雰囲気作りにセミに扮する二葉と栗原

二葉 「ミンミンミン ミーンミンミン」

栗原 「ツクツクホーシ ツクツクホーシ」

新庄を誘うが断られる二葉と栗原

楠木 「近所の花火大会に誘おうと思って呼び出したのはいいんだけども、一緒に花火を見に行こうっていうのが言えなくて…」

えっと、その…夏休み、どっかいくの？」

女 「おばあちゃんちに行くわよ。」

楠木 「そうか、えーと、はな、はな、…」

女 「はな？」

楠木 「鼻声だったよなー今日、小笠原のやつ！」

◆小笠原鼻をすすりながら、上手から下手に通り返し

◆セミの二葉と栗原もついて行って下手にはける

新庄 「だれですか？」

楠木 「友達。」

新庄 「はあ…」

楠木 「だめなんだよ、『花火一緒にいこう』が全然口からでなくてしどろもどろもいいところ！」

女 「夏休みどこかいくの？友達とかと。」

楠木 「あー、うん、行こうかなって思ってた…海は小笠原たちといくし…」

◆浮き輪をもった小笠原が下手から上手に通り返し

◆シュノーケリングやサングラス姿の二葉と栗原も下手から上手に通り返し

新庄 「また出てきましたね、小笠原。」

楠木 「私の青春のメモリーに小笠原はレギュラー出演してるんだ。」

女 「お祭りとか 花火大会は？」

楠木 「え…」

◆慌てて上手から出て来る栗原と二葉。

新庄 「まさかの幼馴染さんから！？」

栗原 「これは誘いましたよね？ね？先生！」

楠木 「静かに。当時の私はものすごく緊張してるから。」

女 「誰かといくの？」

楠木 「…いや、まだ、誰もいってくつて決めてない。」

女 「そうなんだ、私も。」

楠木 「そっか」

女 「うん。」

「暖かく見守る。新庄、二葉、栗原

三人 「がんばれ！がんばれ！」

◆アイスを食べながら上手から小笠原入り

小笠原 「おーい、二人とも何してんだー？」

二葉&栗原 「空気を読め小笠原！」

◆小笠原を上手にはけさせる二葉と栗原

女 「あのさ、よかったら花火大会。一緒にいかない？」

楠木 「え、うん！」

二・新・栗 「は？」

女 「じゃあ、浴衣きるから迎えにきて。」

楠木 「わかった…」

女 「自分から誘ってくれないんだね、男の子なのに。」

◆女 下手はけ

楠木 「つて言われて…」

新庄 「そりや言われますよ。先生へタレじゃないですか。」

楠木 「そんな言い方はないだろ。」

栗原 「いやいや、かなりやばいですって。全日本へタレ選手権があったら
余裕で上位いけるほどのへタレっぷりですよ。」

二葉 「さあ！はじまりました。第4回全日本へタレ選手権！
実況は私、楠木二葉！そして…」

栗原 「解説の楠木です。いやあーなかなかのへタレっぷりでしたね
楠木選手！」

二葉

「いざというときに弱気になるあのヘタレっぷりは、本当に目も当てられません…」

栗原

「おっと、ここで中継が繋がってます。現場の小笠原さん」

◆上手から小笠原入り

小笠原

「はい、現場の小笠原です。いやーあいつは本当にヘタレでしたね」

二葉

「当時の彼はそんなにヘタレでしたか？」

栗原

「楠木選手は自覚はあるのでしょうか？」

小笠原

「ヘタレエピソードで言えば、小学校3年生の習字の時間に…」

楠木

「あ、ばか！お前それはいうなよー！」

ガヤガヤしている4人

少し大きめの咳ばらいをする新庄

おとなしくなる4人

◆下手にはける小笠原

定位置に戻る栗原・二葉

新庄

「で、花火大会はどうだったんですか？」

楠木

「…楽しかったよ。それがきっかけで二人でよくご飯を食べに出かけるようにもなった。」

栗原

「すごい進展じゃないですか！」

二葉

「それからどうなったの？」

楠木

「幼馴染と同じ高校にいきたくて、必死に勉強をした。あ、思えばその頃からだな…物語を書くことに夢中になって行って、いつも自分の考えた話を彼女にしていたんだ。高校1年の夕暮れ時そう、放課後のあの日…」

◆高校時代を再現するのに立ち上がる二葉と栗原

二葉

「キーンコンカンコン」

栗原

「キーンコンカンコン」

二葉

「帰りにクレープ買っていいこうよ」

栗原

「うんいくいく！」

◆高校生時代の女 下手入り
女 「どうしたの？」

楠木 「今日夜あいてる？一緒に飯いかない？」

女 「いいけど。どうして？」

楠木 「新しいストーリーを思いついたんだ、是非聞いてほしくて。」

女 「…それって私じゃなきゃダメ？」

楠木 「その時彼女は少し、悲しそうな怒ってるような表情をしていた。」

二葉 「そりゃまあ、二人でご飯食べるとかってデートだからね」

栗原 「なのに、ずーっと自分の考えた話ばかりしたら嫌がられますよ。」

楠木 「デートだったのかい？あれ。」

楠木以外全員 「はあ？」

新庄 「あの先生？、幼馴染さんのこと好きなんですよね？」

それに二人でご飯いったり、わざわざ同じ高校にまでいって、それってまさしく恋人じゃないですか」

楠木 「当時はまだ付き合ってるとは思っていなかったんだ。」

楠木以外全員 「はあ？」

女 「あなたの書くお話は楽しいし、魅力的だけど、そのお話を聞くのって私でなきゃいけないの？小笠原くんとかじゃダメなの？」

◆上手から小笠原入り

楠木 「ダメなんだ。」

◆上手に小笠原ばつが悪そうにはけ

楠木 「俺、ストーリーの話をするのも好きだけど、何よりもこうやって君と話をしている時間が好きなんだ。話を聞いてくれている君といるのが好きなんだ…その、なんていうか…」

女 「…」

楠木 「君がそばにいてるだけで、つまらない日常も楽しくなるし赤信号にもイライラしない、君と会話をしたり君の顔を見るだけで俺は世界で一番幸せな男になれるんだよ、だから…」

女 楠木の頬にキスをする。

楠木

「あ…」

女

「おしゃべりね。男の子なのに。」

◆女 下手にはけ

二葉

「ちょっとー！何やってんのよお兄ちゃん！！！」

栗原

「ほんと男としてどうなんですかー？」

楠木

「仕方ないだろ。そういったことに疎かったんだから。」

新庄

「疎かったですむわけないでしょう…あれ？でもどうして小笠原さんじゃダメだったんですか？物語の話を聞くの。」

楠木

「…ああ、あいつとは中学卒業してから、高校も離れてしまつてね。私も奴も恋だ、部活だ、夢だと自分たちの生活に大切なものが増えて行き…私が21くらいのかな。奴とばったり駅前で逢うまで連絡がくるまで疎遠だったんだ。」

新庄

「21つていうと…先生がデビューした年ですね。」

楠木

「そう、大学在学中にデビューしてすぐに大学はやめた。彼女とも同棲を初めて順風満帆のはずだった…。」

二葉

「ラブラブじゃない。」

栗原

「うまくいったんですよね？」

楠木

「…いや、あるとき大きな喧嘩をしてしまったんだ。」

◆同棲時代の女下手入り

女

「ひーとは！ねえ、今日何の日か覚えてる？」

楠木 原稿用紙の前で頭を抱えている。

楠木

「ごめん、今それどころじゃないんだ。」

女

「そっか、…夕飯、何食べたい？好きな作るよ。」

楠木

「…」

女

「ねえってば…」

楠木

「いらない、俺の分は作らなくていいから…」

女 「なによそれ、お昼も食べてないでしょ？」

楠木

「若かったじゃすまされないが、人としても未熟だったんだ。デビューした、認められた、もつといいものを、前作を越えるいいものを書かないといけないと頭の中はそればかりになっていた。付き合って三年の記念日なんて頭にもなかった。」

女

「最近寝てないし、このままだと体壊しちゃうよ？少し休もう？」

楠木

「今大事なときなんだよ！寝てる暇なんかないんだ！寝たいなら雪花一人で寝てろよ！」

女

「なんでそうなるの？わたしは貴方の体を心配していつてるんだよ？最近のあなたはおかしいよ、前はもつと楽しそうにお話考えてた、私に話してくれてるときも、もつと笑顔だったし、そんな切羽詰まった顔してなかったじゃん！」

楠木

「うるさいな！俺はプロでやってくって決めたんだ。子供の頃の夢物語のときとはわけがちがうんだよ。俺は作家だ、作家の楠木一葉なんだよ！…体が心配って、誰が心配してくれて頼んだんだ、いいよ、俺の体は俺が一番よく知ってる。雪花は関係ないんだから放っておいてくれよ！」

女

「関係ないの？ あたしは心配しちゃいけないの？好きな人のこと、何とかしたいって思っちゃいけないの？」

楠木

「…」

女

「痛いよ、心が痛い。こんなにそばにいるのに、ずっと遠くにいるみたいじゃん。あなたの夢に私は邪魔なの？私がいけない方が、あなたはあなたでいられるの？」

楠木

「…」

女

「ねえ」

楠木

「ごめん。」

◆下手に走り去る楠木

女

「こんなとき抱きしめてもくれないんだね。男の子なのに」

◆上手にはける女

◆下手入り楠木

気まずい感じで出て来る楠木

楠木 「とまあ、こんな感じで喧嘩をしまして…」

新庄 「先生…」

楠木 「そんな目で見ないでくれよ、まだ若かったんだって」

二葉 「若かったで済まされるわけないでしょう。かまってちゃんのくせに自己中で女の気持ちなんて何もわかってない…」

新庄に制される二葉

新庄 「二葉…。」

ふてくされる二葉

楠木 「うん…」

栗原 「二葉ちゃんが怒るのもわかります。でも、先生だって

いっぱいいっぱいだったんですもんね。…それで、そのあとってどうなったんですか？」

楠木 「話をしたよ。小笠原と」

◆上手から小笠原入り

二葉 「小笠原？」

新庄 「レギュラーの？」

栗原 「鼻詰まりの？」

小笠原 「なるほど、で、そのまんま家飛び出したわけか？」

楠木 「まあな…、小笠原は？」

小笠原 「俺は合コンの帰り。いや、俺の事はいいんだって、お前アレだろ？忙しいから余裕なかったただけだろ？」

楠木 「まあな…。」

小笠原 「お前ら幼馴染でお互いのこと知りすぎてるかもしれないけど、肝心なところわかってないみたいだから、今日の話は言い機会だと思っけきちんと話した方がいいぞ。」

楠木 「うん…」

小笠原 「不安なのはお前だけじゃねえんだからさ。それに泣かせるために俺だってあいつ諦めたわけじゃないんだし。」

楠木 「うん。」

全員 「え？」

小笠原 「ま、とりあえず早いとこ仲直りしろよ。じゃあな」

楠木 「おい！小笠原！？」

小笠原 「あ、忘れてた。デビューおめでとう。」

◆小笠原下手はけ

二葉 「え？どういうこと、小笠原も好きだったってこと？」

楠木 「中学の時に告白してふられたらしい。」

栗原 「へえ…でも、今の電話のくだりで小笠原の株が僕の中で爆上がりしました！！」

二葉 「私も！」

新庄 「同じく。」

楠木 「あらそう。」

新庄 「で、小笠原のアドバイスの通り、彼女さんとはちゃんと仲直りはできたんですよね？先生？」

◆女上手入り

女 「おかえり…」

楠木 「ただいま」

楠木、女を抱きしめてキス。二人仲のいい雰囲気ではける

◆楠木・女下手はけ

栗原 「先生？帰って来てからはどうしたんですかー？」

◆楠木、衣服を整えながら入り

楠木 「その夜は、3年の記念日を祝って…」

新庄 「へえ…で、そのあとは…？」

楠木 「その後は、えっとその…」

◆下手から女入り

女 「ただいまー」

楠木 「雪花おかえり！」
二葉 「雪姉お邪魔してまーす。」

女 「あら、二葉ちゃん」

新庄 「こんにちはー奥さん。」

女 「新庄君もいらつしやい。えーと栗山くん？栗田くんだけ？」

栗原 「栗原ですよ！栗原マコト！」

女 「ほら、あなた。途中で逢ったから連れて来ちゃった。どうぞー？」

◆下手から小笠原夫婦の入り

オフ気味で二葉と談笑する女

楠木 「小笠原久しぶりだなー！」

小笠原 「元氣そうじゃないか。ほら、これお土産。」

小笠原 楠木に土産を渡す。

楠木 「奥さんもこんにちは。予定日いつでしたっけ？」

千代 「来月なんです。」

楠木 「へえ…まさかお前がパパになるなんてな？」

小笠原 「うるせえ。」

新庄 「あの、先生？こちらの方は？」

楠木 「ああ、ほら、新庄くん。私の友人の小笠原とその奥さんだ。」

小笠原 「どうも、はじめまして。」

新庄 「あああああ！あの小笠原さんですか！？」

栗原 「鼻づまりで親友で喧嘩の時にアドバイスしてくれたあの？！」

小笠原 「？ あの、小笠原です。」

不思議そうな小笠原夫妻と女

楠木 「彼は私の担当編集の新庄くんだ。」

オフ気味で挨拶をする小笠原、新庄、栗原

女 「おみやげ。新庄君たちはエクレアとシュークリームどっちがいい？」
新庄 「すみません興さん、じゃあシュークリームいいですか？」

二葉 「エクレアお願いしまーす。」

栗原 「僕は…エクレア！」

女 「はーい。あなたは？」

楠木 「私はシュークリームで。小笠原たちは？」

小笠原 「じゃあ、一種類ずつもらおうかな。な？」

千代 「ええ。ありがとうございます。」

女 「お茶入れて来るわね、二葉ちゃん手伝って。」

二葉 「はーい」

千代 「あ、私もお手伝いします。」

女 「いいの、いいの。大事な体なんだからゆっくりしてて？えーと
新庄君がミルク少な目のコーヒーで、栗田くんはカフェオレ
だっけ？」

栗原 「はい！あ、名前栗田じゃなくて栗原です！」

新庄 「ありがとうございます。」

女 「千代ちゃんは、カフェインの入ってないハーブティーにする？」

千代 「はい。すみません。ありがとうございます。」

二葉 「あたし、ココア自分で淹れるよー」

女 「オッケー、あたしもコーヒーでいいし、小笠原もコーヒーでいい？」

小笠原 「ああ、サンキュー」

楠木 「私は…」

女 「ホットミルクにお砂糖たっぷりでしょ？わかってるわよ。
ちゃんと、お気に入りの猫のマグカップに入れますからね。」

栗原 「猫のマグカップ？随分と可愛い使ってるんですね！」

二葉 「あれ雪姉のじゃなかったんだー、似合わないー」

楠木 「うるさいなあ。耳としつぽがついてて気に入ってるんだ」

小笠原 「おっさんに使われるとはマグカップも思わないだろうなあ」

新庄 「たしかに」

一同 笑う 楠木は不機嫌になる。

女 「ほんと、この人ったら可愛いものが大好きなんですよ。」

女 楠木の顔を覗き込んで

女 「男の子なのに。」

オリジナル主題歌【ローグ】M 33

ひらめいた楠木が、原稿用紙に書きだす。

やる気を出した楠木を見て安心する新庄が女の正体にピンときてない

意味がわかった栗原が一人大興奮

小笠原夫妻の仲睦まじい姿

女と二葉が飲み物を持ってくる

原稿を覗き込む女に恥ずかしそうな楠木

飲み物をこぼしそうになって

暗転